



日本放射線技術学会 名誉顧問

日本医学放射線学会 名誉会員

後藤 五郎先生から序にかえて

待望久しき技術史の発刊に寄せて

名誉会員 細 江 謙 三

待つこと余りにも久しかった日本放射線技術史が、漸く発刊されるとのことであるが、まことに大きな慶びであると同時に、委員各位の並々ならぬご苦勞の程を深く感謝いたします。顧みると編集の企画、委員会発足と作業開始からこの度の発刊までに、25ヶ年の長年月を要したと思うと、何かその理由を問責したい気持ちもないではありません。

そもそも日本放射線技術史を編纂することになったのは、1964年（S.39年）の日本放射線技術学会総会の時、当時の林周二会長の提案に基き総会決議事項として始まったもので、当時の詳しいことはすでに日本放射線技術学会雑誌（S.44年3月）に林周二等により記載されているので省略するが、当初は発刊を5ヶ年をめどとして企画され、委員長を含め7名の常任委員と、全国に78名の地方委員を依嘱し発足したものであります。

歴史編纂のむづかしさは今さらいうまでもないが、その前に技術、技術学の解釈をする必要があります、これについて故滝内政治郎氏が1969年の本会雑誌で「自然のものに対し人間の心が動いて一つの工夫考案がなされ、自然に何物かが加えられたそれが業績である。次にわれわれの扱う技術とは、自然を開発工夫しようとする人間活動の様式であるといわれ、これを取扱うことをTechnologyと称し邦訳では技術学である………」と述べている。何故にこと更このようなことを強述するかの所以は、1942年（S.17年）にさかのぼる。当時京都ホテルで前出滝内と私が東大中泉正徳教授と面談したことがありました。目的は京都レントゲン専修学校を当時の高等工業専門学校並に格上げ出来ないものかについて意見を伺ったことがあります。それは統制政治時代の教育問題については、当時文部省の担当官は、東京帝国大学の関係教授にそれぞれ諮問するのが普通のように聞いていたからであります。

その時中泉教授はレントゲン技術学なるものは存在しないと否定し、従って技術学校等はなくともよい、ましてや高等技術学校を会社が私立で設立するなど許されるものでないと滝内氏を一喝されたので、私等は早々に引上げたことがあった。このきびしい裏付けは二年後に名古屋で開催された日本医学放射線学会の理事会における議題からかも知ることができました。1944年（S.19年）この理事会の議長が名古屋帝国大学医学部の田村春吉教授（後学長）で、この時私は受付など雑務にかり出されていましたが、議事進行中に提案の中に「X線技師の廃止について」という議題がありましたが、誰も提案理由の発言がなく、私はこの議題に驚いていました。ところが咄嗟に田村教授は発言権のない私に意見を求められたのでありますが、幸い誰も発言に対し異議を唱えられなかったので、心中の怒りを押えつゝ、幾つかの理由をあげて廃止案に反対し、時局柄むしろ増員すべきとまで反論をしました。この私の発言に対しまず賛成し強硬に同じように反論されたのが、当時千葉大学におられた中山恒明教授（外科）で、教授は私の例を挙げて今日の医学の発展過程には放射線技師の努力に負うところが甚大であり廃止などをもっての他である、とまで演説され続いて中島良貞、長橋正道両教授もそれぞれ廃止反対論を唱えられ議事は終わったが、こゝで提案者が中泉教授であったことも分った。

世情は急変して1944年（S.19年）9月には軍部の強要によって文部省科学研究補助員養成所という名のもとに、X線技術者の養成が全国数ヶ所の大学に設置され速成教育がなさ

れたが、これがのちの技師資格獲得運動の一端ともなった。

今では各地に技術大学が設立され、これが当然となっているが、放射線技術にも過去にはこんな時代もあった事を想起し、記述するのも歴史の一コマとなると思うことに他ありません。

日本の放射線技術を考えるとX線透視や写真撮影をした人から始まり、これ等の人は物理学者、医師等からであるが、この人たちが技師の創始者とは言い難い。

放射線技術者の形成過程については、人、教育の担当委員（山下）が巾広く解析追求されており再び論ずるまでもありませんが、その論説を高く評価するものであります。

技術史編纂委員会が発足してから8年を経て明治、大正編が発表されており、その間常任委員の絶大なご努力に敬服するとともに感謝するところであります。その後も引続いて昭和編を加えて刊行される筈であったが、林周二委員長の逝去により軌道に乗っていた活動も一頓座してしまったことは、まことに残念であった。

発足以来25年を経た今、漸く発刊を達成されましたことは声を大にして喜ぶべきであります。過ぎ去った10余年の間には楽しみにしていた発刊をみずして他界された人も多数あり、発足当時から見守ってきた者は今では只一人私だけとなりましたが、刊行をみる事のできた人達にも過去を想い起し悲喜こもごもの感が一杯でありましょう。

この技術史発刊のおくれた理由の最たるものの一つに、大戦による資料の焼失、散逸があげられますが、もう一つは編集を行う専従者がなく勤務の余暇を利用しての活動と、所用資金の不足に合せ、若い会員の歴史に対する関心のうすらぎ等があげられると思います。過去には放射線診療技術によって多くの技師が障害に犯され他界されていますが、これ等についても僅かでも記載して欲しかったと思っておりましたが、色々と制約があり削除せざるを得なかった理由を知るだけに残念であります。

おくれたりとはいえ加藤委員長始め担当委員各位の多年に亘る絶大なご努力によってここに技術史の発刊を迎えましたことに対し、深甚なる謝意を表し、労をねぎらう次第であります。

発刊によせて

会長 山田勝彦

本学会にとって積年の一大事業であった、日本放射線技術史が加藤芳郎委員長を中心とした編纂委員会の懸命のご努力により、見事ここに立派な成書として発刊されましたことに対し、心よりお祝い申し上げます。

想い返せば、今は亡き林周二先生が昭和38年に初代委員長に就任され、現在も瀬木賞として本学会にその名を残して頂いている、故瀬木嘉一先生のご寄付を基金として、技術史編纂委員会が発足したことに端を発する。このとき、林先生ほど本学会を真髓より愛され、そして育成された方は他に少なく、小生等も含め多くの人材を育成された。それだけに技術史の完成には殊の外、情熱を燃され、多大の努力を重ねられたが、惜しくも昭和47年に他界されてしまった。そのため技術史編纂の仕事も一時中断してしまったが、委員会発足以来、委員としての仕事をたゆまず続けてこられた加藤芳郎先生が、昭和50年に委員長として就任され、多くの編纂委員のご協力のもと、約25年の歳月を経て愈々ここに完成された次第である。ここに改めて、山下一也担当理事、加藤芳郎委員長始め歴代編纂委員の方々に深甚なる謝意と敬意を表したい。

ご承知のように日本医学放射線学会 名誉会員の後藤五郎先生が昭和44年に名著「日本放射線医学史考」を発刊され、放射線医学の歴史をひもとく唯一の文献として、多くの人に役立てられてきていることは記憶に新しい。片や放射線技術学に関する歴史書が本書であるだけに、その刊行を多くの学会員が日遅しと待ち望んでいたことは事実であり、それだけに此度の発刊の喜びにも一入のものがある。特に近年は日本医学学術集会振興協会(JMCP)による総会開催を通じて、日本医学放射線学会と本学会との交流も一段と深くさせて頂いている中での本書の刊行だけに一層意義深いものを感じる次第である。

先般も印刷原稿を拝見させて頂いたが、その内容は機械装置を中心とした放射線技術の発展は勿論のこと、教育や人物に関する歴史にまで及び、その内容は多岐にわたっている。それだけに本学会にとっての貴重な財産が一つ出来たと深く感謝している。さらにこれから活躍される若い会員にとっても、時には過去を振り返りながら、歴史上に置かれた自己の存在を常に見極めながら前進していくことが必要であろう。その意味でも本書の発刊意義は大きい。

最後になったが、本書発刊に当り、前述した後藤五郎先生が満95才の誕生日をお迎えになる直前の日に「温古知新」の色紙を発刊記念として頂いた。先生の心暖るお心使いに対し、深甚なる謝意を表する次第であります。ここに、これを頂いた私達はこの言葉を深く噛み締めて、次の新しい歴史を作るために全力を傾注して邁進していくことをお誓いして発刊の言葉と致します。

平成元年2月5日記

「日本放射線技術史」委員会発足と経過

技術史委員会

委員長 加藤 芳郎

はじめに

本史をまとめるにあたって、まずもって発想の基礎を付与された故瀬木嘉一博士、故林周二初代委員長に対し、深甚なる感謝の意を表するものであります。

この度びの出版に際し、細江謙三名与会員、山田勝彦会長から序文が寄せられ巻頭を飾ることができたことは、無上の喜びであります。

尚日本医学放射線学会名与会員で、本会名と顧問でもある後藤五郎先生からも序文を頂く予定でありましたが、目下ご療養中であり無理とは思いつ、過日山田会長、吉田委員と同道しお見舞旁々伺ったところ、発声困難な現状から強く辞退されたので割愛せざるを得なかったことは残念である。しかし先生は技術史発刊をことの他喜ばれ、その時に頂戴した色紙で巻頭を飾ることができた。ご老体の先生の一日も早いご快癒を念ずるとともに、刊行に対し感心をもって激励され、発刊を期待されており、序文に勝る支えであると同深い感銘をおぼえた次第であります。

技術史編纂が会の事業として採り上げられてから25年が経過している。歴史編纂の難しさは今さらいうまでもないが、その根幹は人間社会の事物、人物のたどってきた道程や、経歴、そこから発生した現代技術の姿を正確な記録として止めおくことが基本である。そこには一日の空白があればその間に散逸する資料の蒐集が困難となり、事例の裏付け調査にも又支障をもたらす。この風化に歯止めをかけるのが歴史の狙いでありこれを実行するのが生を受けているわれわれに課せられた使命でもある。

この目標に向かって進行していた委員会も会員の期待に十分答えることはできなかったが、一応第Ⅰ部「明治、大正編」を発表するに至っている。

その後林委員長の逝去により委員会活動も一頓挫し、有名無実の状態におかれていた。

1975年（S.50）4月になり上田会長（福島総会）時に組織再編と委員会継続が決議され、たまたま委員長を仰せ付かった。

顧みれば再編委員会も発足してすでに13年の歳月を経たことになる。その間種々な困難に遭ったり壁に突き当たったりして幾度び挫折しかけたか知れないが、その都度故林委員長が生前の第Ⅰ部編集後記で述べている「昭和編を完成し一冊に纏めて刊行するまで委員会は活動する」との遺志の踏襲こそわれわれの義務であると思い踏みとどまってきた。又一部会員の激励と、さきに刊行された後藤先生編による「日本放射線医学史考」の刺戟が委員に大きな糧ともなった。

まとめるに至って、われわれの能力不足と時間に余裕をもたない毎日の勤務のかたわら作業から意ならずも遅々として進まなかった事等、大いに反省しているが、一方では間接的にご協力、鞭撻を頂いた多くの方々に心からお礼を申し上げる。

1. 発足の背景

1963年（昭和38年）、今は故人となられた東京の瀬木嘉一先生から人を介して「私も永い間レントゲンの仕事を中心に生きてきた者である。その間には多くの技師諸君を育て又技

師の協力も得てきた。今思うともう五十年もレントゲン学というものに身を投じた訳である。同じ道を歩む者として技術学会に寄付をする。その使途については何か役に立つことに使ってもらえば良いので学会に一任するから受取って欲しい。尚今後も私の存命中は毎年寄付をつづけて行くつもりである」と有難い寄付の申出があった。(一部24巻5号発表済み) 後刻、当時会長であった林と企画委員であった加藤が岩本町の診療所へお礼かたがた伺ったときも、驕らずに技術学についての歴史や先覚者の功績等を語られた。

従ってこれの使途について先生のご意志を生かす方法として企画委員会として技術史編纂が最も有意義であると考え、1964年(S.39年)の理事会、総会に提議したのである。これが全員の賛同を得るに至り、とりあえず企画委員会がその事業を施行することになった。

その後、故滝内政治郎、金子順治、両先生はじめ樋口喜代治先生等からも趣旨に賛同され寄付が寄せられたので基金に挿入されている。

総会において事業を一任された企画委員会(委員長林、委員加藤、横山)では、この事業の内容が技術の歴史を編纂するものであり、企画委員会とは性格的に異なるものである。しかも具体的には資料収集と記録に残されていない技術の発掘とその裏付け等からみて確実を期するため専門委員会の設置こそ急務であるとの見解にたち至り1964年(S.39年)4月開催の理事会、総会において「技術史編纂委員会」の発足をみたのである。

2. 経 過

委員会はその第一歩として本部に常置委員会を設置し、全国を六地区に分割しそれぞれに担当責任者を置き、さらに各支部推薦による2名宛の地方委員との連絡を密にすることになった。

担当責任者、北海道東北地区(加藤芳郎)、関東中信越地区(遠藤俊夫) 東海北陸地区(横山太郎) 近畿中国地区(山田勝彦:後日小倉佐助と交代) 四国九州地区(山下一也) 庶務会計(吉田弘)

当時この調査に参加頂いた委員は128名を数え、自費で直接、間接にご協力願ったが、こき中にはすでに物故された方が30名以上あり、往年を偲びつゝ、更めて感謝するものである。常置委員会では次の活動方針を決定した。

この委員会の目的は、「本邦に於ける放射線装置、器具の発展普及と放射線技術の変遷進歩の跡を調査し、これを年代別に分類整理して、一貫した日本の技術の歴史を纏める。」とある。第一回の完成期間を5ヵ年計画とした。この調査の手初めとして、全国の会員とくに長老からの聴取を対象としたため、学会組織を活用することにし、各地方支部に委員をおき資料の蒐集や長老の技術歴、当時の装置、器具、あるいは苦労話等を文書連絡によって得ることにし、それを足掛りとして裏付調査に着手した。

又編纂に関しては次のような細部に亘る基本方針が示されていた。

1. 放射線技術史編纂事業計画

目 的 本邦に於ける放射線装置、器具の発展普及、放射線技術の変遷進歩の跡を調査し、これを年代別に分類整理して、一貫した日本の技術の歴史を纏める。

方 法 イ) 全国各支部に2名宛の委員を委嘱し、本部に常置委員会を設置する。

ロ) 主として文書連絡による調査を依頼し、資料の蒐集を行う。

ハ) 資料は常置委員に於て分類整理し、技術史として刊行する。

ニ) 年1回学会時に全委員会を開催し運営方法について協議する。

ホ) 基金は主として寄附による。但し、本部会計より補助金を受ける。基金は本部に会計委員をおき保管する。

ヘ) 5ヶ年継続事業とする。

調査事項 イ) 放射線装置が初めて設置せられた場所、施設名、設置者名、装置名、製作者名、装置の種類、附属品の種類、取扱者、当時の事情その他参考となる事項。

ロ) 各府県に於ける最古の技術者並にその後の変遷。

ハ) 古い装置器具の保有場所、保有者。

ニ) 古い文献の保持者。

以上の計画に基き各担当委員による調査結果を明治・大正編としてその一端を1969年、1971年の二年に亘って報告の形で会誌に掲載したが、最初の作業であり内容、形態ともに十分といえず単に羅列に過ぎなかった点申し訳なく思っている。

明治・大正編			
報告項目	委員長名	担当報告者	報告年
明治・大正時代の編纂にあたって	林 周 二	林 周 二	1969(S 44. 3)24巻 4 号
人、教育	〃	山 下 一 也	〃 〃
撮影装置およびX線管	〃	加 藤 芳 郎	〃 〃
付属品	〃	林 周 二	〃 〃
感光材料・蛍光板・増感紙・造影剤	〃	遠 藤 俊 夫	1971(S 46. 3)26巻 4 号
撮影技術	〃	小 倉 佐 助	〃 〃
照射技術・治療	〃	吉 田 弘	〃 〃

軌道にのり続いて昭和編の編纂に取組む矢先林委員長の死去という事態に遭遇し、委員会も一時自然消滅となり五ヶ年間の空白期を余儀なくされた。

3. その後の歩み

1975年(S.50) 4月福島総会(会長上田稔)で頓挫している委員会の再会が提議可決され組織の再編成が一任された。

同年7月、最初より専門委員として参画していた山下、吉田、(遠藤欠席)等によって第一次委員会を開催し、組織編成と刊行に関する大綱を決し、滝内、細江両名と会員の委員会参画を依頼すること等を協議し実行に入った。

一方先に常置委員会で決定されていたが経費の関係で果すことのできなかった「長老の技術歴と当時の装置、器具の状況、技術習得の苦労話など聴取する」の項目を実施することにした。この聴取によって専門技術者の生まれた動機とこゝに至るまでの過程を知ることができる。

先覚者の教育というか技術習得の方法は、従弟制度から初まっていることは先回発表の通りであるが、その中身は医師の教示があったとはいえ、ほとんどが独学で技術を学び医師ともどもに技術の進歩、発展に努力されたものである。当時技術者は稀少価値的存在であり、医師の仕事の一端を受持つまでに到っていた時代もあった。そこには人間関係から生まれる技術があり、人間関係があってこそ優秀な技術が開発されたと考える。

本書に記載した口述は、細江謙三、綱川高美、梅谷友吉、各名と会員をはじめ赤松晴先

生のものであるが、各先生方にはお忙しい中であり、且つ元気とはいえ無理のできない体であるにも拘わらず、三時間以上に亘って色々な角度から記憶を呼び戻し、且つ記録によって口述された事に対し紙上を借りて心から感謝の意を表すものである。

ここに掲載した記録はできるだけ生のままで掲載することにしたので、内容と年代、変遷に若干のズレのあることは否めないが、技術史を進める上において、その裏付として重要な資料であると思われるものである。

従って文中に（註）としてそれぞれ加えた部分があるが、これは当方において資料にもとずいて調査した結果を加筆したものである。ご了承を得たい。

この他に多数の先輩諸氏とも口述を得ることにし、その了解を約していたものであるが、物理的にその機会を得るに到らない間に、他界された次の諸先生の口述を残すことのできなかった事は残念である。

赤間与三次（40. 8. 13逝去）渥美 博（43. 8. 15逝去）原 治巳（46. 11. 16逝去）
林 周二（47. 6. 24逝去）田中金司（47. 8. 17逝去）金子順司（48. 3. 21逝去）関
忠孝（49. 7. 17逝去）滝内政治郎（52. 3. 16逝去）脇本才志（53. 5. 10逝去）麻川
重敏（54. 4. 17逝去）（敬略）

こゝに掲げた各先生方以外にも多くの先輩があり、それぞれ異なった角度からの口述が得たかったが、何れも1965年（S.40）以前に他界されているので、こゝでは謹んで割愛した。

4. 昭和編について

昭和年代に入りまず特記すべきは本会の創立である。1943年（S.17年）11月16日に開催された創立準備委員会にはじまり、各地に散在独立していた技術者集団がこの日をもって発展的解散を遂げ、大同団結「日本放射線技術学会」が創立されたのである。（本書第8章に記載）

技術の変遷は、戦中戦後の永い空白と混乱期を脱却した1950年（S.25年）をもって一区切りがあったといえる。この期に至って急速な開発がみられ多岐に亘って大きな発展がもたらされた。これ等の推移を見極めるには余りにも資料が膨大となるので、今回は詳細を発表するに至らず一部箇条書きにせざるを得なかったのは心残りであるが、次世代の気鋭の士によって継承されるであろう事を念ずるものである。